

2010.10/27 ~ 11/3

# ビントレーのペンギン・カフェ

同時上演

## バランシンのシンフォニー・イン・C フォーキンの火の鳥

オペラパレス | 6回公演

レパートリー  
Repertory

### シンフォニー・イン・C Symphony in C

振付: G. バランシン 音楽: G. ビゼー 演出: C. ニアリー  
Choreography: G. Balanchine Music: G. Bizet Staging: C. Neary

新制作  
New production

### 火の鳥 ~上演100周年記念~ The Firebird

振付: M. フォーキン 音楽: I. ストラヴィンスキー 装置: D. バード 衣裳: N. ゴンチャローヴァ  
Choreography: M. Fokine Music: I. Stravinsky Scenery: D. Bird Costume: N. Goncharova

新制作  
New production

### ペンギン・カフェ 'Still Life' at The Penguin Café

振付: D. ビントレー 音楽: S. ジェフェス 装置・衣裳: H. グリフィン オリジナル照明: J. B. リード  
Choreography: D. Bintley Music: S. Jeffes Design: H. Griffin Original Lighting: J. B. Read

指揮: P. マーフィー  
Conductor: P. Murphy

管弦楽: 東京フィルハーモニー交響楽団  
Orchestra: Tokyo Philharmonic Orchestra

## デヴィッド・ビントレー芸術監督就任オープニング公演は 豪華3本立て

デヴィッド・ビントレーが芸術監督に就任するシーズンの記念すべきオープニング公演は、時代を越えて感動を生み続ける20世紀の傑作バレエを斬新にセレクトした珠玉の作品が布陣されています。

まずバランシンの『シンフォニー・イン・C』、次に初演から100年目を迎えるフォーキンの『火の鳥』、そしてビントレーの『ペンギン・カフェ』の豪華3本立て。

いずれもバレエ史上に名を残す舞台上、芸術監督就任のオープニング演目はぜひ3作品を一挙に上演して、各作品の音楽が持つ素晴らしさや新国立劇場バレエ団のダンサーたちが持つ多様多彩な魅力を、楽しんでいただきたいという意図で組まれた公演です。

### 『シンフォニー・イン・C』について

バレエの作品は“音楽の視覚化”と形容されるが、まさに当作品は目で見る音楽そのものである。当作品はバレエの中でもたいへん難易度の高いバレエで、初演は1947年パリ・オペラ座、バレエがパリ・オペラ座に招かれて振り付けた作品である。

音楽はパリにちなんで、フランス人作曲家ビゼーが17歳の時に書いた交響曲を使っており、全部で四楽章からなる。楽章ごとに男女プリンシパルとソリスト、コール・ド・バレエが登場し、華麗に優雅にそれぞれ異なった雰囲気を描く。複雑でスリルに満ちたパ・ド・ドゥやポワントワーク、思う存分振り動かされる四肢。刻々と隊列を変えながら縦横無尽に舞台を駆け回るコール・ド・バレエ。その全てがバレエ独特の素早さで繰り広げられ、舞台はめくるめく躍動感に包まれていく。最終楽章で全キャストが一堂に会し、まさに絢爛豪華なフィナーレとなる。新国立劇場バレエ団のクオリティの高さを存分にご堪能いただける作品である。



### 『火の鳥』について

初演は1910年6月。新国立劇場で上演される2010年は初演より100年の記念すべき年となる。ロシアの民話に基づく1幕2場のバレエで、当作品はバレエ・リュスの第2回パリ公演の中心的な作品。1913年に初演された『春の祭典』と並んで、同バレエ団の代表作となる。

ディアギレフがこの作品の音楽を若手作曲家のストラヴィンスキーに依頼、世界はもとよりロシアでも無名だった彼はこの作品で世界デビューを果たした。この作品が持つ濃厚なオリエンタリズムやエロティシズムが当時のパリの観客を魅了した。



photo by Bill Cooper

### 『ペンギン・カフェ』について

1988年3月に英国ロイヤルバレエで初演。今や英国でロングセラーとなっている作品だが、初演当時、作品が持つメッセージ性故に通常の新作バレエに対する評価とは違った意味でも話題になったという。絶滅寸前の動物たちを主人公とするこの作品は、単に環境保護を提唱するものではないようだ。動物たちの踊りは時に衰退や絶滅に瀕した哀しみをたたえるが、一方でユーモラスで愉快でもある。堅苦しくなりがちなこのテーマを観客たちにごく自然に受け入れさせるこの見事な手法はビントレー独特の世界観によるところが大きい。



## ジョージ・バランシン (1904～1983)

George Balanchine

1904年、サンクトペテルブルグ生まれ。帝室バレエ学校に学ぶ。24年バレエ・リュスに入団し29年に同バレエ団が解散するまで『アポロ』『放蕩息子』など10作品を振り付けた。33年に渡米、リンカン・カースティンらとニューヨークでスクール・オブ・アメリカン・バレエを開校する。48年に発足したニューヨーク・シティ・バレエを終生の活動拠点とし、アブストラクト・バレエを主体とするスピード感溢れる清新なスタイルを確立した。アメリカを代表する振付家であるだけでなく20世紀の最も重要な振付家の一人。83年ニューヨークにて死去。



## ジョルジュ・ビゼー (1838～1875)

Georges Bizet

1838年、パリ生まれ。9歳でパリ音楽院に入学し、フランソワ・マルモンテル、シャルル・グノー、ジャック・アレヴィらに師事してピアノ、ソルフェージュ、オルガン、フーガで一等賞を獲得した。17歳で『シンフォニー・イン・C』を作曲、19歳でカンタータ『クローヴィスとクロティルデ』でローマ大賞を獲得。歌劇などの劇音楽を作曲の中心とし、25歳のときの歌劇『真珠採り』でオペラ作曲家の地位を確立する。その後フランス人の作家アルフォンス・ドーデの劇『アルルの女』の付随音楽や、歌劇『カルメン』などを作曲。

## ミハイル・フォーキン (1880～1942)

Mikhail Fokin

1880年、サンクトペテルブルグ生まれ。帝室バレエ学校に学び、卒業後はマリインスキー劇場バレエのソリストとして活躍。ロシアを訪れたイサドラ・ダンカンの踊りに大きな衝撃を受け、振付表現の統一された、心理的な意味づけのある「新しいバレエ」を提唱した。『シェヘラザード』『薔薇の精』『レ・シルフィード』『ペトルーシュカ』などバレエ・リュスの初期の作品のほとんどを振付けた。1918年以降はロシアを出てフリーの振付家として活動し、各国に招かれてバレエ・リュスのレパートリーを広めた。42年ニューヨークにて死去。





イーゴリ・ストラヴィンスキー (1882～1971)

Igor Stravinsky

1882年ロシア・ロモノソフ生まれ。作曲家。指揮者、ピアニストとしても活動。20世紀を代表する作曲家の1人として知られ、20世紀の芸術に広く影響を及ぼした音楽家の1人である。生涯に作風を次々に変え続けたことで知られ、創作の分野は多岐にわたった。さまざまな分野で多くの名曲を残しているが、中でも初期に作曲された3つのバレエ音楽『火の鳥』『ペトルーシュカ』『春の祭典』が名高く、特に原始主義時代の代表作『春の祭典』は、音楽史上の最高傑作の1つにも数えられている。2010年は世界デビューとなった『火の鳥』が作曲されて100年になる。

デヴィッド・ビントレー

David Bintley CBE

※P3参照

S.ジェフェスとペンギン・カフェ・オーケストラ

4人から数十人で構成され、主要メンバーとして活躍していたS.ジェフェスが、幼少の頃よりカナダやヨーロッパ各地を転々とした経験や知識、そして音楽に対する情熱を最大限に活かし、クラシック音楽、ミニマル音楽、民族音楽、現代音楽などの要素を取り入れた多様なジャンルをクロスオーバーした音楽となっている。ビントレーがこの『ペンギン・カフェ・オーケストラ』から、インスピレーションを得てそれぞれの絶滅寸前の動物とそのイメージに合った曲を選びS.ジェフェスがオーケストラ用にアレンジし、この約40分のバレエ『ペンギン・カフェ』が誕生した。